

〔特集〕

## 学ぶということ，人を育てるということ

——浜松地域の産業研究と教育への想い——

渡 部 いづみ

浜松学院大学現代コミュニケーション学部

### 要 旨

自身の研究・教育活動の原点となった幼少期の家庭環境と恩師の言葉にあった共通点。新卒で入社した企業では、決められた期限と予算の中で最高の結果を求められることを学んだ。大学院では、多くの先生方に物心両面で支えられながら、学ぶことと人を育てるものの魅力に引き込まれていった。自身の人生において全く選択肢になかった教員という仕事には、短期間で魅了された。変化の最中にある浜松地域の繊維産業を、ライフワークとして今後も研究し続けていく。自分がこれまでに受けた恩を、返すのではなく、次の世代に送ることが使命である。

キーワード：恩師，言葉の訓練，大学教育，地場産業研究，恩送り

## Learning and nurturing people

——Industrial research in the Hamamatsu area and my thoughts on education——

Izumi WATANABE

Faculty of Modern Communication Studies  
Hamamatsu Gakuin University

## 1 研究・教育の原点

2010年9月に十名先生にお声掛けいただき、「経済科学通信」(No.123)に「地域(浜松)産業研究への思いとチャレンジャー社会人・大学院生・大学人の経験を通して」というタイトルで自身の半生を綴った。あれから9年の歳月が過ぎ、この度、光栄なことに再度、先生から原稿執筆の機会をいただいた。今回は、その後の9年間を含めて、もう少し深く、研究・教育に携わる者としての自分に迫ってみたいと思う。

今の自分が、研究者や教育者という肩書きで仕事ができているのは、間違いなく、大学・大学院時代の恩師である山下甫先生との出会いがあったからである。そのことは2010年にも紹介した。学部時代のゼミから現在に至るまで、山下先生に教えていただいたことは、言葉に尽くせないほどあり、奨学金で通った博士後期課程では、物心両面で研究の日々を支えていただいた。そんな山下先生に掛けていただいた言葉の中で、特に印象に残っているものがある。

ひとつは、「何事も納得がいくまで追求するあなたのしつこさは、研究者に向いている。」というものだ。これはもちろん先生の私に対する褒め言葉であるが、私は幼い頃からこの「しつこい」という言葉を、特に母から言われ続けていた。母親の言うそれは、決してポジティブな意味ではない。私と違ってさっぱりした気性の母は、何でも納得するまでは次に進めない私の性格を面倒だと感じていた。そして私自身も、自分ではどうしようもないこの気質を、時に厄介であると考えたこともあった。

しかし、この「しつこさ」が研究に役立つの

だという。未だに研究以外には、面倒だと感じることもあるが、自身の個性を認めてもらえた、自分を見つけてもらえたこと、安心感のようなものに包まれた。

もうひとつは、「以心伝心などというものはない。親でも夫婦でも、自分が何を考えているのか、言葉で説明しなければ、正確に相手に伝わらない。」というものだ。言葉を使うことなく、気持ちを察し合う関係の心地よさについて語った私だったが、先生からは更に、「言葉を生業にする者が、自分の気持ちを説明できなくてどうするのか。これまでに言葉を使う訓練ができていないことが問題だ。」とお叱りを受けた。

私は、両親と祖母、兄が2人の6人家族に育った。父は、小さな繊維問屋を営んでいたが、経営者の常で、年中、考え事をしているような神経質な人であった。父の帰宅後や休日の朝など、子ども達が大声で騒いで、家長である父の安息を妨げないよう、母も祖母もピリピリしていた。そのような環境のせいで、家族であっても「空気を読むこと。」と「気を遣うこと。」は、私達の最重要ミッションであり、それは、敢えて「決まり」などと言う必要もないほど、我が家に深く染み込んだ掟のようなものだった。相手の気持ちは、「読む」もの、「感じる」ものであり、言葉で自分の気持ちを表す必要などなかった。先生に指摘されるまでもなく、人に気持ちを伝える訓練など、できているはずもなかった。

しかし、そんな我が家であっても、親から注意を受ける際には、「なぜ叱られると思うか、自分の考えていることを言ってみなさい。」「自分が悪くないと思うなら、自分の口で説明しなさい。」などと、5歳程度の幼い年齢から言われ続けた。理不尽に怒られたと感じたことも無いではないが、頭ごなしに押さえつけられることは少なかった。

そんな時、子どもながらに、何とかこれまでの状況を説明しようと頑張ったことを思い出す。両親が、「教育」を意識してこれを行っていたのかどうか、今となっては確かめようもないが、山下先生のおっしゃるところの「言葉の訓練」をされていたようにも思う。図らずも、研究や教育にとって大切なものが、自身が育つ段階の中にあり、私の中から先生がそれを引っ張り出して下さったと感じる。

## 2 私を育ててくれた場所と人

学部の卒業研究で、「浜松の地場産業とテクノポリス構想」をテーマにし、その卒論を高く評価してもらえたことが就職につながったことは既に述べた。

就職した会社は、いわゆる機能性野菜や果物を扱う中堅企業で、食管法がまだまだ幅を利かせる1980年代後半にあって、非常に先進的な取り組みをしている所だった。

会社では、営業や営業事務、企画、生産管理など、様々な仕事に携わった。帰宅は毎晩深夜1時~2時で休日もほとんどなかったが、当時は、働くということはそんなものだと思っていたし、社歴が浅くても大きな仕事を任されているという充実感もあった。

思えばこの期間に、日本の農業が抱える課題や、農協と生産者の関係、農業と経済を巡る問題など、身をもって学ぶことができた。このことは、近年の浜松地域の農業研究や、授業の一環として行った「HGU朝市」の活動にも繋がったことから、人生において無駄なものは何ひとつないことを実感できた。

そしてこの会社勤めの経験は、フィールドワークにおける対象企業への取材や、大学で担当するキャリア系科目の授業の際に大いに役

立っている。

企業という組織に所属するビジネスマン達は、決められた期限と予算の中で、最高の結果を出すことを常に求められ、日々、非常に厳しい環境の中で活動している。僅か6年ではあるが、自身がそのような場に身を置き、働いた経験は、研究活動にも影響を与えている。

学部時代、山下ゼミで最初に教えられたことは、「本に書いてあることが正しいとは限らない。自分の目で確かめていないことは、疑ってかかれ。」である。しかし、人の言うことを鵜呑みにしないということは、自分に、それが正しいのか正しくないのかという判断ができる知識がなければならない。そこでまた私達学生は、勉強することの重要性と知を追求することの果てしなさを思い知らされるのである。

一転して、社会人生活を経て入学した大学院では、純粋に学ぶことの楽しさを味わった。博士前期課程では、研究を将来の仕事にしたいなどと思って勉強していたわけでは全くなかった。長い人生の、いわばモラトリアムのつもりで「勉強だけ」をする日々を満喫した。それまでの重苦しい生活から解放され、2年間という自由をどう使おうかと心が弾んだ。

大学院では、産業論の山下甫先生、技術論の星野芳郎先生、理論経済学の降旗節雄先生、統計学の松下嘉米男先生、経済史の酒井昌美先生など、学部でもお世話になった憧れの教授陣にご指導いただいた。今思えば、その道の権威である先生方に投げ掛けた質問は、きっと幼稚で専門性のかけらもないものだったはずだ。しかし、先生方の誰一人として、私の質問を軽くあしらうようなことはされなかった。研究室を訪ねれば、どんな時でも時間をかけて熱心に、私が納得するまで疑問に答えて下さった。本当に、いつでも、どんな時にでもだ。自分が大学教員

になってわかることだが、教員にも様々な仕事がある。授業準備、論文執筆、学会発表、そして校務、当時の先生方もどれほど忙しかったことだろう。相手が学生であれ、誰であれ、教を乞う者には、真摯に向き合うという先生方の姿勢は、今の自分にとって何よりのお手本となっている。

学ぶことの真の楽しさを教えて下さった先生方との時間を思い出すと、感謝で胸が熱くなる。

先生方にいただいたものは、まだ他にもある。山下先生は、オーケストラやミュージカル、降旗先生は、歌舞伎や落語、アングラ劇場のお芝居、松下先生はコンサートや美術展、先生方の解説付きの小旅行は、田舎から出て来た私にとって、何にも代えがたい貴重な経験であった。酒井先生には、「学外授業」との名目で、度々贅沢な食事をご馳走になった。未知のものを知る、知識を得るということが、人生にどれほどの喜びをもたらすかということ、先生方は身をもって教えて下さったのである。

大学院で学び始めて一年も経たないうちに、私は、その魅力に取り憑かれていた。そして、その掛け替えのない時間が、今も私を大学という場に惹きつける原点となっている。

### 3 大学で教えるということ

モラトリアムだったはずの大学院での学びが、研究を仕事にするという目標に変わったのは、博士後期課程に進むと決めた時であった。2年間と決めていた学生生活を更に数年間、延長するにあたっては、両親の心配もかなりのもので、私自身にも迷いがあった。それでも、前述のような素晴らしい先生方に恵まれ、研究を続けたいと思う自分の気持を抑えることはできなかった。試験結果が出るまでは、誰一人とし

て私の進路について言及する先生はいらっしゃらなかったが、進学が決まってから、多くの先生方がそれを望んで下っていたことを知った。

奨学金を受けるために推薦状を書いて下さった星野先生、研究室の掃除のアルバイトだと部屋に呼んだのにも拘らず、ずっと勉強を教えて下さった松下先生、新聞記事のスクラップや学会の事務仕事を、やはり“アルバイト”と称して、任せて下さった山下先生、先生方の過分な心遣いに支えられ、研究生生活がスタートした。

博士後期課程に進むということは、その後、3年以上も大学院に通うことになる。前期課程と合わせて5年以上も大学院で学ぶのであれば、専門性を活かした仕事に就きたいと思うのは自然なことであったと思う。

研究を仕事にするということは、一般的には大学に就職し、教員になるということを意味していた。

商売人である両親は、教員という職業を好んでいなかった。幼い頃から「先生になどなるものではない。」と言われて育った。漠然とはあるが、しかしかなり頑なに、先生にだけは絶対にならないと決めていた。そんなこともあり、大学教員になるのは、研究を続けるための手段だと、非常に消極的な気持ちで、しかし必死に就職の機会を求め続けていた。

専任教員として採用されるまで、15年ほど非常勤講師として仕事をした。その間にわかったことは、絶対にならないと決めていた「先生」という仕事が、どうやら自分には非常に向いているということであった。自分の仕事ぶりを自分で評価することはできないため、飽くまで自分に合っているかどうかという観点である。とにかく、学生と向き合っていることが楽しい、自分の学んできたことを人に伝えられることが嬉しい、そして人を育てることに大きな喜びを

感じている自分を発見し、求められることに応えようとしていた自分より、自分が求めることをすることの大切さに気付いたのである。

そのような意味では非常勤講師も悪くはなかったが、安定した研究の場が無いことと、関わることでできる学生が限られることに、物足りなさを感じていた。もっと多くの学生と一緒に学びたい、もっと深く学生と関わりたい、そのような気持ちで、専任教員というポジションに拘るようになっていった。

そして2011年に浜松学院大学に専任教員として採用されることとなったのだが、同じ年の2月に、8年以上介護していた母親が亡くなり、父もその3年前に亡くなっていたことから、両親に「思う存分仕事をしなさい。」と背中を押されているようにも感じた。介護では、心身共に追い詰められた日々を送っていたため、心置きなく仕事に没頭できるという意味で、最良のタイミングであったと思う。

切望していた専任教員となり、ゼミの担当学生を持たれたことは何よりの喜びであった。入学してきた学生を精一杯の愛情をかけて育て、4年で卒業させる。もちろん、学生は毎年入れ替わっていくが、多くの学生に関わるうちに大学での教育について気付いたことがある。

学校教育において、大学が最後の砦であるということだ。このような表現をすると、各方面からお叱りを受けることになるかも知れないが、敢えて書かせていただくこととする。

小学校の先生は中学校に、中学校の先生は高校に、そして高校の先生は大学に生徒を送ることができる。しかし、私達大学教員は、ほとんどの場合、学生をどこかの学校や先生に送ることはできない。これまで学校教育を受けて来たひとりの人間が、まさにこれから社会の荒波に向かって船を漕ぎ出そうとしている。そして私

達は、その荒波がどれほど大きく激しいものかということを知っている。それを知る私達が、その大波の躰し方や乗り越え方を教えないなどということは許されない。なぜなら、船が転覆し、学生が溺れてしまうことがわかっているのに、その波の躰し方を教えないということは、あまりに無責任だからだ。

大学で受ける教育は、ほとんどの人にとって、学校で学ぶ最後の機会となるということに、私達はもう少し注意を払う方がいい。

では、最後の砦として、学生に教えておかなければならないことは何だろうか。大事なことは、問題の答えを出すのではなく、世の中には様々な問題があり、その答えはひとつではないということを理解できるということだ。答えを知っていることより、自分自身で主体的に考え、主体的に行動できることが大切だと教えておかなければならない。そして、そういう学生を育て、社会に出していかなければならない。

ゼミの授業の一環で行ってきた「HGU朝市」という活動は、学生を主体的に行動させるために非常に役立った。毎週金曜日の10時～12時15分、大学の正門脇で野菜、果物等を売る。買い物客は、近隣住民、大学教職員、学生などである。朝市の休みは年に3～4回、学生の長期休暇の間も出店する。2012年5月より2018年2月末まで、およそ6年間、営業は実に277回を数えた。大学で行っている活動として、おそらく他には無い、非常に特異なプロジェクトであったと自信を持っている。

店舗の設営、品出し、接客、片付け、会計まで、ほとんどの仕事を学生が行う。この朝市に参加するまでは、人前で思うように話せなかった学生が、3年間の活動を経て営業職に就いた。地元の野菜・果物を扱ううちに、浜松地域の農業に興味を持ち、卒業研究では生産者を取材し



て素晴らしい論文を書いた学生もいた。朝市で多くの人と触れ合ううちに、人に必要とされることで自信を持ち、採用面接で朝市のことを話し続け、上場企業に就職した学生もいた。

お客様に喜ばれ、教員に褒められ、仲間に信頼されるようになった学生は、一様に、何かの魔法にでもかかったように自信がつく。そうして見違えるように成長した学生を、何人も見て来た。

#### 4 浜松地域の産業研究への想い

自身のライフワークとも言える浜松地域の地場産業研究についても触れたいと思う。

近年は、主に当地域の繊維産業を研究している。2018年には、企業経済研究会や日本地域経済学会全国大会で、2019年には産業研究会でも浜松地域の繊維産業関連の報告を行った。

これもまた山下先生からであるが、「私達は学者ではない、研究者である。常にフィールドに出て調査対象に直接当たり、自分で確かめたことのみ研究の材料としなければならない。」と教えられた。あれから27年経つが、今も自分の研究スタイルは、フィールド調査と決めている。

かつて輸送用機器、楽器と共に、この地の3大地場産業と呼ばれた繊維産業の規模は、現在の浜松市の製造品出荷額全体の約1.6%まで落ち込んだ。(平成29年工業統計調査) 従来の受注生産、委託加工中心の業態は行き詰まり、「浜松に持って行けば織れないものはない。」とまで言われた高い技術力を十分に活かしてきていないことも課題だ。近年、急速に進展した国際化、IT化への対応も遅れている。

それでも当地の繊維業界には、日本各地の繊維産地が衰退していく中で、激しい淘汰を繰り返

しながらしぶとく生き残ってきた生産者達がいる。ここ数年は、これらの先進的な取り組みを行う繊維企業に注目している。

織布業者でありながら、自力で海外の展示会に生地を出品し、プラダやアルマーニなどのハイエンドブランドの製品に採用された古橋織布有限会社。産地問屋に頼らず織物業と企画、販売まで行う新しい流通形態を模索し続け、これまでにない細い糸で「光透けるストール」を開発した有限会社福田織物。更に、鈴木晒整理株式会社では、「量を追わずに質を追求する。」をポリシーに、ユニークな加工技術を開発し、世界にひとつしかない生地加工を生み出している。ルイ・ヴィトン、エルメスなどから定期的に仕事依頼を受けている。

1980年代後半よりファッション業界を席巻したSPA(製造小売)にもほころびが見え始め、素材の安全性やストーリー性、社会貢献など、消費することの意味を考える消費者も現れるようになった。売り先を選べる商品力を持てば、アパレルが存在しない産地でも生き残る道はある。

規模や資本の大きさととらわれることなく、世界市場の情勢や動向を受信し、世界市場に情報を発信する力を持つ人や企業なら、全世界と取引ができる。そのためには、産地企業間や異業種間の連携、統合が重要で、自社製品のファクトリーブランドや地域ブランドなどを確立する必要がある。

日本では衰退産業の筆頭である繊維産業だが、世界の繊維市場は大きく需要を伸ばしている。アパレル市場は、2025年まで年平均3.6%成長すると予想されている。(経済産業省2017年「繊維産業の現状と課題」) 世界中の誰もが利用できるデジタル・ITはその技術よりも利活用能力が問われている。織布や生地加工技術

の開発も重要であるが、その技術を活用して価値を創造することもまた同じく大切なことである。産地内の産業構造が変わろうとしている今だからこそできる、サプライチェーンの再構築を目指す必要がある。

浜松地域の繊維技術や製品を、工芸品としてではなく産業として残していくべきであると考えたことが、自身の研究の原点であった。繊維産業は、当地の工業発展の系譜の中でも重要な役割を担ってきた。それは、経済的寄与度だけでは計ることのできない貢献とも言える。

今後の研究では、産業観光などの可能性も探りつつ、当地の繊維産業の新たな展開を模索していきたい。

## 5 今後の使命「恩送り」

ここまで働く・学ぶ・研究するという視点から自身の人生を振り返ってきた。研究論文とは違うこの文章の、正解は何なのかと自問自答しながら、結局は想いのままに筆を進めてきた。

原稿を読み返してみると、これまでの人生が優しく温かい出会いによってつくられたものだということが改めてわかる。そして、自分自身で築いたものは、ほんの少し、数えるほどしかないことも思い知らされる。

生涯を通じて最も尊敬する恩師、山下甫先生は、今年で93歳になられた。さすがに厚かましくて、論文指導などはお願いできなくなったが、先生がそこにいて下さるだけで、何とも言えない安心感がある。

私にも同じように卒業した学生達から頻繁にメールや電話の連絡がある。上司との付き合い方、仕事へのアドバイス、内容は様々であるが、先日そのうちのひとりが発した言葉にハッとさせられた。

「自分が何をしたらいいか迷った時は、渡部先生だったらどうするだろうと考えて、先生がしそうなことを選んでしています。」というものだ。これは、私が山下先生と出会い、師事するようになってから、ずっと心掛けていることと同じだった。山下先生のご見識、先見性、動かない理念など、自分と比べられるような存在ではないが、とにかく意外だった。

教え子に、それほど信頼されるのは嬉しくもあったが、それより、私自身がお手本になるような生き方をしているのかと思うと、甚だ怪しく、居心地が悪かった。

その教え子からは、卒業時にも印象深い言葉をかけられた。「これまで先生に受けたご恩は、どのように返せばいいですか？」というものだ。これもまた、私が山下先生に問うた言葉と同じだった。彼には、昔、自分も恩師に同じ質問をしたこと、恩師から返って来た応えは「恩返し」ではなく「恩送り」だったことを話した。

「恩返し」は、自分がしてもらった親切やいただいた恩を、直接、同じ相手に返すこと、しかし「恩送り」は、恩を受けた人が、直接相手に恩を返すのではなく、別の人にその恩を送っていくことをいう。

山下先生は、「私がしたことでああなたが少しでも楽になったのであれば、その想いを他の誰かに渡して下さい。できればあなたより若い世代の人がいいでしょう。私も自分の先輩達に恩をいただいてきましたが、同じ人にはとても返せるようなものはないので、少しでも先輩達の恩に報いるつもりで、次の世代に恩を送っているのです。」と説明して下さいました。

彼は、「必ず次の世代に繋げます。」と涙を流して約束してくれた。

この「恩送り」を通して、自分には素晴らしい恩師と教え子がいてくれたことを、改めて感

謝せずにはいられなかった。恩師や先輩、親への恩返しは、少しでも成長した自分の姿を見せることだと思うが、それには長い年月が必要で、簡単なことではない。しかし、相手を特定しない「恩送り」は、時と場所を選ばない。私が、多くの先輩方から受けた恩を、どれだけの人にもどのように送ればいいのかを考え続け、送り続けていくことが、きっとその方々への恩返しになるのだろう。

幸い、この仕事は、若い世代と常に向き合っていける仕事であり、彼らは、私が送った恩を必ず次の世代に渡していつてくれるはずだ。

この幸せな仕事に従事できていることに改めて感謝し、自分をここに導いて下さった多くの恩人達に、人生を楽しむこと、努力すること、他人のために生きることを誓いたい。

最後に、十名先生にはいつもお心に掛けていただき、ご指導いただき、何度もチャンスを与えていただいた。感謝してもし尽せない。何よ

り、研究者として教育者として精力的に活躍され続ける十名先生のお姿に、いつも刺激と感動をいただいている。改めてお礼を申し上げたい。

## 主要業績

### 著書

大西勝明／小阪隆秀／田村八十一編〔2018〕『現代の産業・企業と地域経済』晃洋書房第17章

大西勝明編著〔2015〕『日本産業のグローバル化とアジア』文理閣第7章

### 論文

渡部いづみ〔2019〕「浜松地域の繊維企業の挑戦(2)」『浜松学院大学研究論集第15号』

渡部いづみ〔2018〕「浜松地域の繊維企業の挑戦」『浜松学院大学研究論集第14号』

渡部いづみ〔2015〕「農産物の直売を通して行う地域貢献と地域振興—HGU朝市の可能性—」『浜松学院大学地域共創センター紀要第3号』